

拝啓 晩秋の寒さを感じる頃となりました。皆様お変わりございませんか。いつもエンカウンターをお読みいただきありがとうございます。今近所の公園は、紅葉がきれいです。夏から秋にかけて気温の変化の激しい年は紅葉がきれいだそうですが、今年は特にそう感じます。朝散歩の時、紅葉の間から太陽の光線が輝いているのを見る時は聖霊が降っているような感じを受けます。

今月は、小西先生の『ローマ人への手紙講解説教』の第7回目です。小西先生は、ロマ書3章24節を「常に義とせられつつ」と現在分詞形に訳され、「何度も罪を犯しながらも、常に義とされて復活の朝に至る」と説明されています。今井館の集会で佐生健光さんは、これを、恵心僧都の横川法話の「臨終の時までは妄念の凡夫だが、来迎にあずかりて…」と同義であるとおっしゃいました。

11月3日第9回南原繁シンポジウムが開催され、170名の方が参加され、よい会でした。今年は、「南原繁と新渡戸稲造」がテーマでした。私は、パネルディスカッション「新渡戸稲造の代表的著書をめぐって」の司会者を務めました。

新渡戸先生は、カーライルの「衣服哲学」を34回も読んだ程、座右の書とされていました。この本のさわりは、「第9章 永遠の肯定」にあり、その中心は、「Do the Nearest Duty.」にあります。南原先生もこの言葉を、最初私がお会いした時にも話されたし、いろいろな講演でよく話されました。小西先生も、昭和37年12月23日のロマ書大観の講義の中で、「信望愛」の「愛」とは、目の前の義務を実行すること、カーライルのサーターリサートの「Do the Nearest Duty.」と同じであると言われました。新渡戸稲造先生の最も好きだった言葉は、LongfellowのPsalm of Life(人生の讃歌)という詩の中の、

Act, -act in the living Present!

Heart within, and God o'erhead

(行動せよ、生ける「現在」に行動せよ!

内には心、そして上には神をいただいて!)

だそうです、これも同じ意味だと気が付きました。

11月12日(月)雨模様の日でしたが、南原研究会の鈴木英雄さんと二人で、八柱霊園の鴨下重彦先生のお墓参りをしました。先生の1周忌とシンポジウムのご報告をしました。鴨下先生も、今年のシンポジウムで1時間の講演(その中心は、志を高く持て!)の1週間後急逝されました。南原先生の死と同じく、最後まで全力を尽くされた素晴らしい生き方でした。

寒さがだんだん増してくる時期、お身体ご自愛のほど、祈り申し上げます。

敬具

平成24年11月26日

山口周三

エンカウンターの記事各位